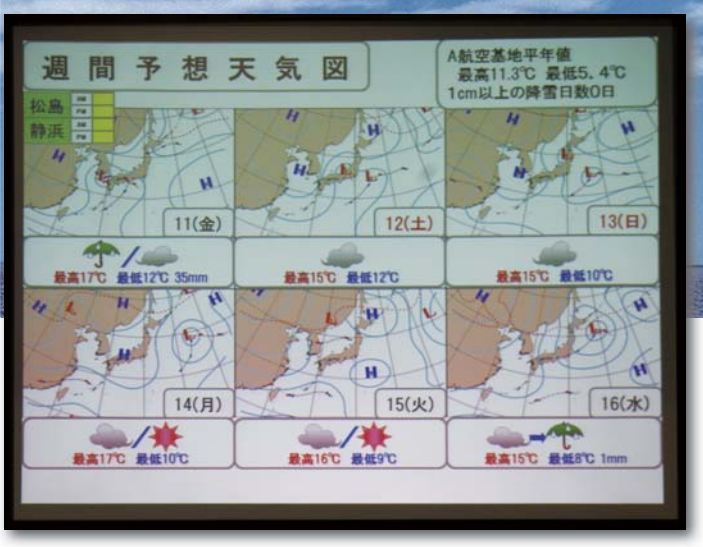
航空自衛隊 航空気象群

航空気象群は、航空自衛隊の任務遂行に必要な気象予報や気象観測のほか気象情報の収集や伝達等の業務を行うとともに、府中基地における基地業務を行う部隊である。航空気象群司令兼 府中基地司令 塩田修弘1等空佐は、府中基地に所在する群本部、中枢気象隊、基地業務隊のほか、全国19カ所の気象隊を指揮している。府中基地は、滑走路こそないものの、航空気象群のほかに航空支援集団司令部、航空保安管制群本部、航空開発実験集団司令部、電子開発実験群本部など、航空自衛隊の中核となる部隊が所在する。



気象部隊の予報官（気象幹部）及び観測員と呼ばれる隊員たちは、刻々と変化する自然を相手に任務をこなす。必要な気象情報をユーザーへ伝達するため、ユーザーの行動を事前に把握し、周到に準備する。

伝達する気象情報を収集するのも時間との戦いで容易ではないが、伝達手段の一つである気象ブリーフィングも容易ではなく、豊富な経験と訓練を積まなければならない。そこで、航空気象群では、気象予報及び気象観測の技術向上のため各部隊及び選抜選手による気象技術競技会を行っている。今年は11月30日から8日まで間、各部隊で天気図解析、天気図記入、作戦予報（短期予報・航空路予想）及び遠隔ブリーフィングの競技を行い、12月9日から府中基地で選抜選手（気象幹部、観測員）による、机上観測、気象ブリーフィング及び筆記試験（気象知識等）の競技が行われた。ブリーフィング競技では、A飛行場で航空祭が開催されるという想定のもと競技が行われた。各競技者は、A飛行場の基地司令等を仮定した審査員（隊員）を前に、航空祭の実施に必要な気象ブリーフィングを行った。ブリーフィング終了後、基地司令役の審査員から質問が飛ぶ、「この冬に天気についての長期予報は?」などと航空祭関連の質問だけではなく、一般気象のことまで聞かれていたが、そこは焦らず回答していた。ブリーフィング競技を待つ隊員の緊張した顔を見ると、この競技会の「重さ」が良く解った。

気象技術競技会の歴史は古く、昭和38年8月に「気象観測競技会」を行ったのが最初。翌39年からは毎年「気象予報技術競技会・気象観測技術競技会」を実施、当時は、各気象隊の代表者（気象幹部・気象観測員）が府中に集まり各種天気図の作成技術を競っていた。平成2年度から20年度は、予報及び観測を統合し、「気象競技会」となり、平成17年度以降は隔年で整備部門を加えた。

気象競技会を終え、塩田群司令は「各種競技において、それぞれが真摯に取り組み、気象技術の錬成成果を遺憾なく発揮したことを確認した。気象群として、任務遂行能力を確認するとともに、気象技術の底上げを図ることができたと認識する。作戦支援部隊として、更なる精強化に邁進し、もって国民の負託に応じることを要望する」と訓示を述べた。

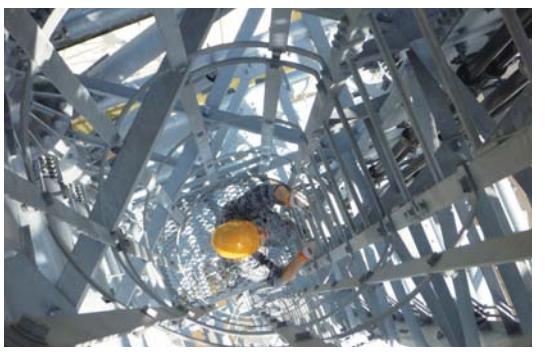
27年度気象技術競技会

総合優勝	百里気象隊
第2位	入間気象隊
第3位	横田気象隊

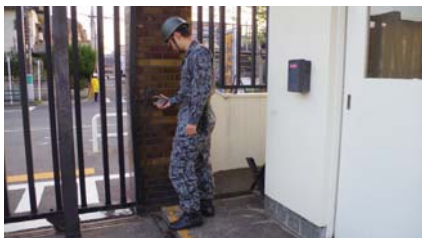
ブリーフィング部門

第1位	百里気象隊
第2位	入間気象隊
第3位	千歳気象隊

航空気象群隷下で唯一の気象以外の部隊である基地業務隊。府中基地の通信・補給・施設・管理（輸送・警備）・業務（給養・厚生）・会計及び衛生等の業務を約170名で行っている。この基地業務隊の名物は、巨大な鉄塔と警備班の過酷な訓練である。　府中基地は各地の基地に比較して面積は狭いが、各司令部が所在するため基地所在隊員数は多い。「基地業務隊は人手不足ではあるが、隊員は明るく、士気は極めて高い」と隊長の久保山健一2佐は語る。



25年11月10日に新しく建てられた府中基地名物「巨大な鉄塔」。高さは99.35mあり、30階相当の高さがある。府中市内では、類を見ない高い建造物。命綱を繋いだ隊員2名が階段と梯子を登り、恐怖に耐えながら点検整備作業をしている。梯子に登るだけでも脚がパンパンになるという。



警備班は、毎朝過酷な訓練をしている。警備は24時間をシフト制で行っているため、夜勤明けの隊員も朝の過酷な訓練に当然参加するが「かなりキツい」。腕立て伏せ、腹筋、懸垂、背筋等の筋力トレーニングを織り交ぜながら基地内を外周に沿ってランニングした後、徒手格闘、小部隊行動訓練等の能力向上に余念がない。また、陸上自衛隊との協同訓練も盛んで、連携強化を通じ基地警備能力を向上させている。